

日系アメリカ人と太平洋戦争－収容所体験と記憶の伝承をめぐって Japanese-Americans and World War II: Internment Camp Experiences and the Transmission of Memories

加藤好文
Yoshifumi Kato

One hundred and fifty years have passed since friendly relations between Japan and the United States began in 1860, but during World War II (1941-45), Japanese living in the US and Japanese-Americans experienced a violation of their human rights through forced internment. Following the war, this tragedy had wide repercussions in American society and is imprinted in the country's history as a negative legacy that cannot be ignored by individuals or by the nation as a whole. In this presentation I will consider how the sites of internment camps have been preserved and how their stories have been passed on, focusing on the site of the Manzanar internment camp in California.

During a period of six years (2004-2010) I visited the site of the Manzanar camp on three occasions and observed that the site is gradually being improved and buildings from internment days are being restored. In addition, on viewing the memorial monuments, plaques, and exhibits, I could feel the reality of the lives of the approximately 10,000 people interned in this desert area and could understand how this was a "special place" where 150 people died from disease and other causes.

The conclusion I have drawn is that the sites of forced internment of Japanese-Americans, as represented by the Manzanar camp, have three major meanings - as memorials, as places for confirming national ideals, and as places for learning history. In the first instance, from a personal standpoint, they are places for commemorating the people interned and their lives, as well as the dead, but at the same time they are places for people to heal and to confirm their identities. In the second instance, these are places to examine "justice" in a democratic American society that takes "freedom" and "equality" as fundamental principles. Thirdly, as familiar historical and sightseeing spots, these sites are places where American children can experience the past and learn about history. In short, the internment camp sites are sacred spaces with the power to cause visitors (pilgrims) to commit the place to memory and tell others about it, and on occasion to stir people to protest. They are truly American "sacred places." It is the responsibility of all of us living today to preserve and improve these sorts of valuable historical legacy and to transmit their history and memories to future generations.

1 はじめに：日米親善150周年にあたって

日系アメリカ人の歴史の痕跡を辿ってみようと、2010年10月半ばにアメリカ西海岸を訪れた。主な目的は、ワシントン州シアトル、そしてカリフォルニア州ロサンゼルスとサンフランシスコ、これら三都市の日系人街の今を見てみるとこと、国定史跡として最も整備が進んでいるカリフォルニア州マンザナー（Manzanar）収容所跡を訪問することであった。そもそも、2003年夏にカリフォルニア州の州都サクラメント市に滞在し現地在住の日系人とお会いして以来、そのような方々のお世話になりながら、日系人ゆかりの場所を訪ねる旅を重ねてきた。太平洋戦争（1941-45）中に日系人が収容されていた強制収容所に関して言えば、2004年9月のマンザナー収容所跡を皮切りに、2006年7月にはユタ州にあるトペーズ（Topaz）収容所跡、2008年3月には再度のマンザナー、さらに同年10月にはカリフォルニア州最北端にあるトゥーリレイク（Tule Lake）収容所跡の3カ所を実際に訪問し、マンザナーはこれで三度目である。

今回の旅の締めくくりに、サンフランシスコ郊外コルマにある「日本人共同墓地」を訪れた。そこには、アメリカ人から「ジョージ・シマ」と呼ばれて親しまれた、ジャガイモ栽培で成功した「ポテト・キング」牛島謹爾の墓もあれば、「戦死者

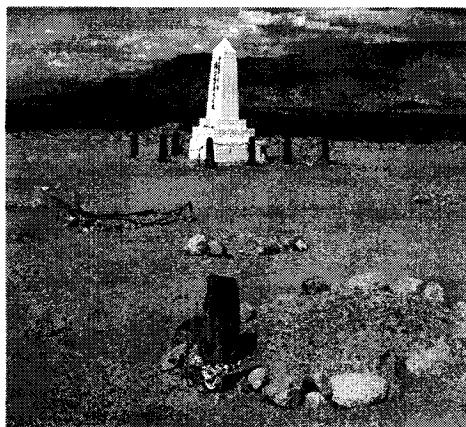


慰靈塔」と刻まれた無名戦士の墓もあった。その中で、前掲した「日米親善永遠なれ」と刻まれた石碑を前に、並んで建つ三基の墓石が目に留まった。いずれも、1860年の遣米使節団に随行した勝海舟率いる徳川幕府の軍艦「咸臨丸」の水夫たちの墓で、サンフランシスコで病死し、この地に葬られた初めての日本人だという。偶然お会いした日系の墓地管理人の話によると、ちょうど150周年にあたるということで、春には植樹祭をはじめ記念の式典がこの場で執り行われたのだそうだ。この150年の間には、日系アメリカ人たちが20世紀初頭の移民問題に端を発する日米摩擦から太平洋戦争の戦渦に巻き込まれ、強制収容という超法規的な人権侵害を体験する。そしてその悲劇は、戦後、アメリカ社会に大きな波紋を広げ、個人としても国家としても、無視できない負の遺産としてアメリカの歴史に刻印されることになったのである。

そこで本論では、三度に亘るマンザナー収容所跡の訪問調査の成果を中心にしながら、太平洋戦争による日系アメリカ人の強制収容という歴史を記憶に留め、後世に語り継いでいく手段として、アメリカにおいて現地がどのように保存され、どのように顕彰されてきたのか、筆者の目に留まり写真に収めた具体的的事物にこだわって考察してみたい。

2 日系人強制収容所と跡地整備の意義

太平洋戦争中、アメリカ合衆国西海岸の軍事境界地域内に居住していた日系アメリカ人（日本人一世を含む）約12万人は、砂漠地帯や湿地帯など厳しい自然環境の中に設けられた全米10カ所の収容施設のいずれかに収容された。周囲を鉄条網に囲まれ、監視塔（写真：高さ約15mで2005年9月に復元）からは銃を装備した兵士に四六時中監視されるという厳戒態勢で、その3分の2はアメリカの市民権を有する二世でありながら、基本的人権を蹂躪され、まさに「囚人」同然であった。その



中の一つ、カリフォルニア州マンザナー収容所跡は、ロサンゼルスから北東に車で4時間あまり入ったところで、「不毛の砂漠地帯」デスバレーと接するシエラネバダ山脈の麓に位置している。訪れる度に自ずと足が向くのは、収容所開設中の1943年に建立された約7mの高さの「慰靈塔」の前であり、その周辺に埋葬された死者たちの小さな墓である（左の写真）。そこには、これまで多くの人々が慰靈に訪れたことを物語るかのように、たくさんのコインや思い出の品々が置かれている。側に立てられたプレートの一つには「聖域」（Sacred Space）という標題の下に、以下のような文が添えられている。



Life at Manzanar was uncertain, but the prospect of dying behind barbed wire, far from home, may have been unthinkable. On May 16, 1942, Matsunosuke Murakami, 62, became the first of 150 men, women, and children to die in camp. He and 14 others, most infants and older men without families, were laid to rest in this cemetery outside the barbed wire fence in an old peach orchard from Manzanar's farming era. Here, in the shadow of majestic Mt. Williamson, their somber funerals and memorials were attended by hundreds of mourners. While some deceased were sent to hometown cemeteries, most were cremated and their ashes held in camp until their families left Manzanar.... Today, only six graves here, including Matsunosuke Murakami's, contain remains; families requested the removal of others after the war.

1942年5月に62歳の被収容者が亡くなつて以来、有刺鉄線に囲まれたこの地で合計150名の人々が亡くなり、その一部が、収容所内の病院に近いこの墓地に埋葬されたという。そして現在では、6名の遺骨がここに眠つてい

ることである。荒れ地に建つこの慰靈塔を前にすると、この地が周辺の景観をも巻き込んで、まさに「神聖な空間」であることがひしひしと伝わって来る。

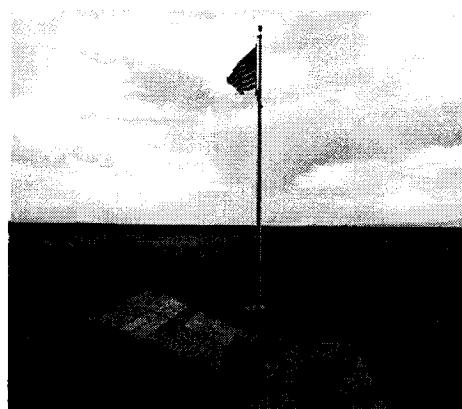
そもそも日系人たちが強制収容されることになった経緯は、周知のように、1941年12月7日午前、日本軍によるハワイの真珠湾奇襲攻撃に端を発する。日米間に戦争が始まると、まずは日系人社会の中でもリーダー格の人物やスパイ活動可能な技術や機材等を有した者たちがFBIに拘束され、司法省管轄の抑留施設に送られて取り調べを受ける。その翌年の2月19日には、時の大統領フランクリン・ルーズベルトによる大統領令9066号が発令されることにより、所謂「保護」の名目で、西海岸地域に住む日系人全員が当初は既存の施設（共進会場や競馬場など）に一時収容され、その間に急造された強制収容所に転送され収容されることになる。以下の引用は、日系人作家ヨシコ・ウチダが、自らも収容された当時のユタ州トバーズ収容所の様子を綴ったものである。

The men of our block had spent the entire day planting willow saplings that had been transported into camp from somewhere beyond the desert. The young trees looked too frail to survive in the alkaline soil, but we all felt anything was worth trying. We longed desperately for something green, some trees or shrubs or plants so we might have something to look forward to with the approach of spring. There existed a master plan that called for the planting of one large tree in front of every mess hall and the lining of the two-hundred-foot-wide firebreaks between each block with trees as well. It was a nice thought, and efforts to make it a reality got under way in December, but were eventually defeated by the harsh climate and the unfriendly soil. Our desert remained a desert, and not even the industrious Japanese Americans could transform it into anything else. (Desert Exile 125)

いかに過酷な自然環境であったかが想像できるであろう。殺風景な砂漠地に緑の樹木を植えて少しでも潤いをもたらそうという日系人たちの努力も虚しく、アルカリ質の土壤では植物がまともに育たないのである。ここに掲載した写真は、筆者が2006年にトバーズを訪れた際に撮った夕暮れ時の収容所跡の風景である。荒れ野と化した人影ひとつない収容所跡地を背景に、アメリカ国旗と当時の様子を記した記念のプレートだけがひっそりと佇んでいた。プレート上に目を凝らしてみると、校庭に勢揃いした小学生たちや親子の楽しげな光景が垣間見える一方、戦死した息子を弔う母親の悲しげな表情が見る者的心に迫って来る。

1万人前後が収容された各収容所は、最大8名（一家族ないし2家族）が寝泊まりできる一部屋に人数分の簡易ベッドとだるまストーブが一つ、天井からは裸電球1個が吊るされただけで、父親がスパイ容疑で抑留されて不在の中、先述した母親と娘たち3人のウチダさん一家も手に持てるだけの荷物を抱えてこのようなバラック（別名、アパートメント）に収容されたのである。もちろん、敵国日本人の血を引く彼らに対する一般市民による暴力行為からは守られていたとは言え、アメリカ兵の監視付きで、食事は大食堂でみんなが一斉に食べ、その他日常生活に必要な施設なども共同利用で、プライバシーなどないも同然であった。そのような中で、例えば1942年12月5日にはマンザナー収容所内で暴動が発生し、当局による武力鎮圧の際に、銃で撃たれた被収容者が2名死亡している。

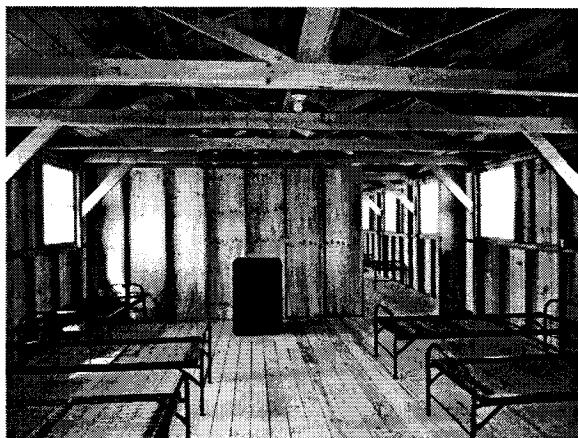
米国国立公園局が発行している“Manzanar”というPark Brochureには次のような解説文が載っている。



日系アメリカ人の強制収容所は米国内でも特に住環境の劣悪な地域に設けられました。そのため、人々は住環境の改善に力を尽くしました。マンザナー強制収容所内には、ブロックと呼ばれた36カ所の居住地区がありました。ひとつの地区につき、14棟のバラック、大食堂、洗濯場、アイロン場、そして男女別の便所兼シャワー室がありました。バラック内にあった部屋の広さは縦幅が約6メートル、横幅が約7.5メートルでした。各部屋にはストーブと小さな電灯が設けられました。収容所にいる間、人々は住所、名前、そしてID番号が記された名札を常に携帯しなければなりませんでした。バラックは建て具合がとても悪く、収容された人々はすきま風やすきま風とともにに入ってくる砂の対策に

苦労しました。ブリキ缶の底を利用して床にある穴を埋めることもしばしばありました。後に、人々は壁紙やリノリウム製の床を使い住環境の改善に努めました。トイレとシャワー室には区切りがなく、水着を着てシャワーを浴びる人々や、誰もいないときにトイレを使う人々もいました。

このようなバラック小屋については、これまで資料や映像あるいはミュージアムに展示されたその一部を見て全体を推測するしかなかったが、2006年12月にアメリカ議会が全国10カ所の強制収容所跡の復元と調査のためとして\$38,000,000の歳出を決定した一環であろうが、この度マンザナー収容所跡を訪れてみると、居住地区「ブロック14」の復元が始まっており、写真のような四部屋で一棟のバラック小屋が新たに三棟お目見えし、現在、内部を整備中であった。



ところで、マンザナー収容所跡の慰靈塔の側には、先に言及した「聖域」の解説プレートの他にも、大きく「慰靈塔」と書かれたプレートが設置されて人目を引く。そこには遺産（Legacy）と題して以下の解説文が添えられ、その冒頭で、このモニュメント（慰靈塔）が、マンザナーを保存し自国アメリカ政府による被害者12万余りの日系アメリカ人のことを記憶するための「草の根運動」を鼓舞するイコンの役目を果たしてきたと述べている。

Over the years, this monument has become an icon, inspiring a grass-roots movement to preserve Manzanar and remember the sacrifices of 120,313 Japanese Americans confined by their own government.

Buddhist minister Sentoku Mayeda and Christian minister Shoichi Wakahiro first returned here on Memorial Day 1946. For the next 30 years, they made “pilgrimages” to honor Manzanar’s dead.

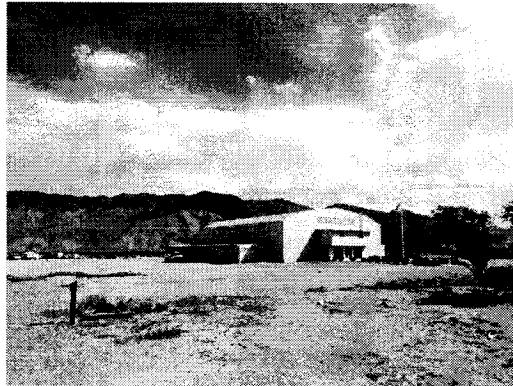
Amid the 1960s civil rights struggles, younger Japanese Americans spoke out, shattering their elders’ silence and shame about the camps. On a cold December day in 1969, 150 people journeyed here on the first organized pilgrimage. An annual event ever since, Manzanar Pilgrimage attracts hundreds of people of all ages from diverse backgrounds. On the last Saturday of April, they gather here for a day of remembrance with speeches, a memorial service, and a traditional ondo dance.

Visiting the cemetery anytime can be a personal pilgrimage – of reflection, worship, remembrance, or protest. Some people leave offerings – coins, personal mementos, paper cranes, water and sake, and religious items – as outward expressions of the ongoing, unspoken conversations about America’s past and its future.

引用文中に「巡礼」（Pilgrimage）という言葉が散見されることからも分かるように、1960年代アメリカ社会に吹き荒れた公民権運動のさなか、日系二世たちを中心として、両親の沈黙や恥辱感を打ち破り、具体的な行動を起こしたのである。こうして1969年以降、毎年4月の最終土曜日に、様々な背景の人々がこの地に集まり、巡礼と呼ぶにふさわしい一連の儀式が行われるようになり、今日に至っている。そもそも巡礼の旅（名所・旧跡への旅）には、「不完全で痛みを伴う過去の裂け目を修復し、死別、喪失、分裂の傷を癒し、旅の参加者を健全

化することにつながる」行為も含まれるという(*Pilgrimage in Popular Culture* 222)。従って、上記引用文からも理解されるように、マンザナーなどの収容所跡地は、その体験者たちにとっては当時を回想し、死者の靈を慰め、自らの癒しともなり、その他の者にはアメリカの歴史を体感し、「自由」、「平等」という基本的な人権を守るために活動へのステップとなるなど、巡礼者たちそれぞれの思いや立場を写し出す鏡の役目を果たすのである。

このような行動の一つの具体的成果と言えるのであろうか、1972年にはマンザナー収容所跡がカリフォルニア州の歴史ランドマークに指定され、さらにその20年後の1992年にはNational Historic Site（国定史跡）に指定されて、この地が収容所の歴史を語り継ぎ、アメリカ市民としての権利を守ることの大切さを記憶する場に認定される。そしてついにマンザナー収容所跡地に、2004年4月、以下のような資料館（Interpretive Center）がオープンし、日系人の歴史が収容所問題を含めてトータルな形で学べるようになったのである。



この資料館は収容所開設当時に様々な行事を行うための体育館として利用されていた施設を改装したもので、内部には収容されていた人々の名前が一面に掲げられ、当時の様子を物語るたくさんの資料や品々が展示されている。しかしながらそこには、1941年の「パールハーバー」の写真が、それからちょうど60年後の2001年に起こった「同時多発テロ」の写真と重ね合わせて展示され、冒頭にはBenjamin Franklinの“*They that can give up essential liberty to obtain a little temporary safety deserve neither liberty nor safety.*”という言葉が添えられていることも事実であり、歴史へのアプローチにも注意せねばならない。

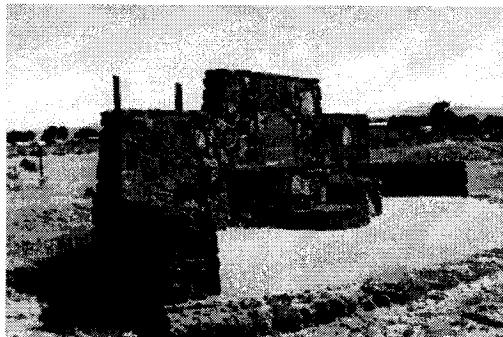
話は収容所時代のことに戻るが、大統領令発布から約1年が経過し、戦局も連合軍優位になり始めた1943年2月になると、解放後の調査アンケートとして、収容所の日系人に出所申請書（Application for Leave Clearance）が配布される。その中で特に、合衆国軍隊に入り戦闘任務につく意志を問う質問27と、合衆国に対する無条件忠誠を問う質問28が、人々にアメリカに対する不信感を募らせ、親子の間にも不和や軋轢を生む大騒動を巻き起こす。「敵性外国人」として収容所に幽閉しておきながら、その一方で祖国日本ではなく合衆国への忠誠を誓わせる内容に対して、一世も二世もそれぞれのアイデンティティに不安を禁じ得なかつたのである。しかし、その不安や不信、さらには憤りをも乗り越えて、多くの二世たちがアメリカへの忠誠心を示すべくアメリカ軍に入隊し、日系二世のみで編成された第442連帯戦闘部隊は、ハワイの第100歩兵大隊とともに、1944年、ヨーロッパ戦線に派遣されテキサス部隊の救出作戦に当たる。その時の彼らの活躍が戦後になって大いに評価されるところとなり、現在に至るまで米国史上最も栄誉ある戦闘部隊として知られる事になる。

1945年に第二次世界大戦が終結するが、それと相前後して各地の収容所は順次閉鎖され、「不忠誠組」の隔離施設の役割を担っていたトゥーリレイク収容所を最後に、10カ所すべてが姿を消すことになる。しかし、解放された日系人たちの戦後は、それぞれの地で非常な困難を伴う再出発となり、正当な法的手続きを経ないままの収容所送りという基本的人権の侵害に対する裁判訴訟など、様々な差別との闘いの連続であった。そのような中でも、1952年にマッキャラン・ウォルター移民帰化法が可決され、日本生まれの一世上初めてアメリカ国籍取得の道が開かれたことは画期的な出来事であったし、その後も、マイノリティたちの公民権運動の追い風も受けて、戦前に作られていた日系人に対する差別的な法律なども順次撤廃されていくことになる。

ところで、2008年10月に訪れたトゥーリレイクにおいて当時と変わらず筆者を迎えてくれたのは、切り立った岩のカースルマウンテンとアワビの形に似たアバロニマウンテンという特徴的な二つの山だけで、その場の歴史を知らなければ通り過ぎてしまっていたかも知れない。そしてそこで、写真のような道路沿いに建つ石碑

が目に留まった。その中央には、1979年5月27日の日付で、以下のような文章が刻まれていた。

Tule Lake was one of ten American concentration camps established during World War II to incarcerate 110,000 persons of Japanese ancestry, of whom the majority were American citizens, behind barbed wire and guard towers without charge, trial or establishment of guilt. These camps are reminders of how racism, economic and political exploitation, and expediency can undermine the constitutional guarantees of United States citizens and aliens alike. May the injustices and humiliation suffered here never recur.



特に、これらの収容所が「人種差別主義により合衆国憲法が踏みにじられたことを記憶させる場」であるということを明記し、「ここで起こった不正義と恥辱が二度と繰り返されないように」と祈る言葉で締めくくられていることは看過できないであろう。

こうした歴史の直視を通じた結果として、1980年には連邦議会で初めて戦時中の日系人の強制収容に関する調査委員会が設置され、83年に同委員会は戦時中の日系人収容は機密上必要ではなかったとする結論を発表する。こうして、1988年によくやく「市民自由法」

が成立するのである。その第一条は次のように記されている。

合衆国議会は、第二次世界大戦中、合衆国政府の民間人強制退去・転住・抑留政策によって、日系の合衆国市民および在留日系外国人の双方に対し、重大なる不正義がなされたことを認める。これらの行為は、国家安全保障上の正当な理由なく、また彼らによる諜報活動や破壊工作の事実なきにもかかわらず、強行された。これは主として人種的偏見と戦時集団狂気、それに政治的指導力の欠如により引き起こされたものである。排除された日系人は有形、無形の莫大な損害を被り、また教育や職業訓練の面で計り知れないほど大きな損失を受けた。にもかかわらず、適切な償いがいまだになされていない。これら日系人の市民的自由と、憲法で保障された権利の侵害にたいし、議会は国家と国民に代わり謝罪する。

当時のレーガン大統領が、公式に、人種差別に基づく日系人強制収容の事実を認めて謝罪するとともに、被収容者一人につき2万ドルの補償を行うことを決定したのである。トゥーリレイクに収容されていたノボル・シライ氏がその自叙伝の中で、Now it was ironic that we Japanese and our offspring who had been treated so badly by America loved this country in spite of it all. Even if America had forsaken us, we would not forsake America. We worked hard to abrogate the anti-Japanese immigration bill and succeed in lifting the shame that had hung over Japanese people everywhere. (Tule Lake 206)と述べているように、最後までアメリカを愛し、見捨てなかつた彼らのリドレス運動が最終的な成果を得たのである。強制収容から40年以上が経過し、既に亡くなった一世も多く、遅きに失した感は否めないものの、これにより一定の区切りがついたことも事実であろう。

3 おわりに：歴史と記憶の伝承のあり方

日系アメリカ人収容所跡地について「聖別化」と「アメリカ的正義」の観点から論じた以下の Kenneth E. Foote の指摘は、「アメリカ的聖地」を考える上でも重要である。

Designation in the 1970s could lead to sanctification now that the Civil Liberties Act has been passed. It could be argued that some of these sites, such as Manzanar and Topaz, are already well on their way. At both sites the commemorative markers spell out exactly why the sites are significant.... Even if the powerful messages already inscribed on the relocation centers are amplified in coming years, they will be exceptions to the rule that seems to consign such sites to invisibility; few other great

miscarriages of American justice are marked in the landscape. (*Shadowed Ground* 305-8)

1970年代初めに史跡として選別されたマンザナーはもちろんのこと、引用にも見られるトパーズや、さらにはトゥーリレイクも含め、1988年に「市民自由法」が成立した後、国レベルでの収容所跡地整備が着実に進んでいる今日、ある意味、それぞれの跡地がすでに聖別化されていると言っても過言ではないであろう。

これまで見てきたように、マンザナー収容所跡を代表格として、日系人が強制収容された場は、少なくとも三つの意味を持つだろう。一つは「追悼の場」であり、もう一つは「国家的理念の確認の場」、最後は「歴史学習の場」である。第一は、パーソナルな立場で、収容されていた人々やその収容所生活についての回想や死者に対する慰靈でもあれば、自らの癒しでもあり、さらにはアイデンティティを確認する場ともなるだろう。第二は、「自由」、「平等」を基本理念とするアメリカ民主主義社会の「正義」を検証する場なのである。第三については、身近な史跡観光地として、過去を追体験し、歴史を学ぶ場と言えるものである。要するに、収容所跡地は、訪れる者がその場を記憶し、他者に伝え、場合によっては抗議行動を誘発する強力な磁力を持った聖域であり、まさにアメリカ的な「聖地」なのである。そしてこのような貴重な歴史的遺産を大切に保存・整備し、その歴史と記憶を後世に語り継ぐことが今を生きる私たちに課された責務と言えよう。

【参考文献リスト】

- Foote, Kenneth E. *Shadowed Ground: America's Landscapes of Violence and Tragedy*. 1997. Revised and Updated. Austin: U of Texas P, 2003.
- Inada, Lawson Fusao, ed. *Only What We Could Carry: The Japanese American Internment Experience*. Berkeley: Heyday Books, 2000.
- Mizuguchi, Mami, ed. *Bridge of Hope: The Road Traveled by Japanese-Americans*. Torrance, California: J & L P, 2007.
- Reader, Ian and Tony Walter, ed. *Pilgrimage in Popular Culture*. Wiltshire: Palgrave, 1993.
- Shirai, Noboru. *Tule Lake: An Issei Memoir*. 1981. Tr. Ray Hosoda. Ed. Eucaly Shirai and Valerie Samson. Sacramento: Muteki P, 2001.
- Uchida, Yoshiko. *Desert Exile: The Uprooting of a Japanese-American Family*. 1982. Seattle: U of WashingtonP, 1993.
- National Park Service 編 ‘Manzanar’ (U.S. Department of the Interior)
- 加藤好文「アメリカにおける史跡保存と『巡礼』の文化史的意義—日系アメリカ人収容所跡地をめぐって」
(『愛媛大学法文学部論集 人文学科編』28、2010年)
- 野崎京子『強制収容とアイデンティティ・シフト—日系二世・三世の「日本」と「アメリカ」』(世界思想社、2007年)
- 平本敦代監修「加州日系人慈恵会のしおり (2010年・咸臨丸サンフランシスコ寄港150周年記念)」(加州日系人慈恵会、2010年)
- 村上由見子『アジア系アメリカ人—アメリカの新しい顔』(中公新書、1997年)
- 村川庸子『アメリカの風が吹いた村—打瀬船物語』(愛媛県文化振興財団、1987年)
- 村川庸子『境界線上の市民権—日米戦争と日系アメリカ人』(御茶の水書房、2007年)